

# 人間的

鈴木一夫

# 問いの

# 本質

「存在者」が

「存在する」という

驚異の中の驚異を

経験する人のために

# 電子書籍の操作について

- ・ 目次をクリックすると、該当ページまで移動します。  
また、移動先ページの見出しをクリックすると、目次に戻ります。
- ・ 「十字キー」やマウスのホイールを使用して読み進めます。
- ・ 「フルスクリーンモード」に設定すると、読みやすくなります。

「フルスクリーンモード」設定方法

メニューバー「表示」→「フルスクリーンモード」

Escキーで元の表示に戻ります。

※パソコン環境により、「フルスクリーンモード」が使用できない場合があります。

# 人間的

鈴木一夫

# 問いの

# 本質

「存在者」が

「存在する」という

驚異の中の驚異を

経験する人のために



カントの『純粹理性批判』において阻まれた、經驗を超えたところについての言説、及びそれについての試論（『純粹理性批判解説ノート』を抜粋併記）



「あらゆる存在事物のうちで、ただ人間のみが、存在の声に呼びかけられて、あらゆる驚異中のこの驚異を経験する。この驚異は存在事物が存在するということである。」

『形而上学とは何か』「後語」 ハイデッガー選集



## はじめに

本書がこれから取り組もうとしている「人間的問い」とは、もっぱら存在に関する問いということになる。それは我々存在者自身の依って立つ地平に関わる為、我々の最も関心を惹かれる事柄である。そういうことから、存在については、今日まで多くの哲学説が説かれてきている。本書においても、著述内容に直接的に関わる哲学説については、それら著作からの引用が必要であった。引用に際しては、 $\langle$  の記号を用い、引用した箇所のみ示は、(『著書名』p.123)のように記した。しかし、学説によつては頻繁に引用しなければならぬところもあり、読みづらいものになったように思う。ことに本書の著述に際し、避けて通れないのが、カントの学説(「カントの定言」の章)である。このカントの学説は難解を極め、その解釈のためには『純粹理性批判』(篠田英雄訳 岩波文庫)から多くの抜粋を余儀なくされた。また一部には岩波書店カント全集4『純粹理性批判』(有福孝岳訳)、『純粹理性批判』(原佑訳 平凡社)を参照とした。本書が『純粹理性批判』の解説書の体をなそうとするものであるならば、その内容を平易なものに改めて表現する義務を負うのであろうが、もとより本書の目的は表題に掲げた如く他にあり、

なおかつ『純粹理性批判』の内容を適確に把握する為にも、さらに、本書との連関を簡明に示す為にも抜粋が最善であると判断した。確実な意味内容の伝達が必要とされる箇所は、抜粋が最も安全な方法であり、また考察箇所の特定がいかなる解説方法よりもわかりやすいと考えたからでもある。ところが、書き進めてゆくうちに、抜粋と解説が膨らみ過ぎて『純粹理性批判』解説ノート』と題して、別著作とせねばならないようなことになった。しかし元々本書においてカントの学説は重要な部分に関連するので、その引用を必要とする。そこで、第一章第三節（二）（カントの定言）において、この一部を用いるという形にした。

このノートは、単に『純粹理性批判』の理解ということだけでも、充分役立つものになると思ふので、『純粹理性批判』と、この第三節（二）とを比較しながらの熟読を望みたい。翻訳書では原書に対して忠実を期さねばならないので、簡明をめざすにはおのずと限界がある。それを克服しようとするれば、このような著し方しかないということでもあった。この著作（『純粹理性批判』）の理解には多大な困難を伴う。これは衆目の一致するところであろう。いままでどれ程多くの研究者が悪戦苦闘してきたかは、想像に難くない。だから、理解されることこそ、第一義的なこととして、そのほかのいろいろな規制に優先させた。難解なるがゆえに一層忠実に解釈という立場は守らねばならない。そうすることでのみ、著者の言葉通りの理解をめざすことができる。

このノートにおいても、もちろんカント解釈の内容に関しては、著者の意図通りの理解に努めた。

そうこうするうちに、『「純粹理性批判」解説ノート』は、次第に、私にとってカントを理解してゆくうえでの欠くことのできないものとなっていくた。読者への解説の手助けというよりもむしろ、私自身の『「純粹理性批判」解説のための必読ノート』と言った方がいいのかも知れない。だから、第一章第三節(二)(カントの定言)は、自説を著述してゆく上で、並べて掲載したというふう理解してもらってもいいと思う。なお、解説書としての、H・M・バウムガルトナー著『カント入門講義』からは、『「純粹理性批判」の解釈にあたって、多くのものを参考にさせていただいた。そのことをここに注記しておかねばならない。

## 目次

はじめに…………… 7

## 第一章 存在への問い…………… 15

### 第一節 問いの原点…………… 16

- (一) 我々は問題に突き当たると…………… 16
- (二) 「存在の問題」に取り組む前の問題…………… 17
- (三) 「存在の問題」の生ずる地平、状況…………… 23

### 第二節 認識根拠と生成根拠…………… 34

- (一) 「存在」に対する二通りの問い方…………… 34
- (二) 根拠律の論理的、及び実在的意味…………… 40

(三)	認識根拠と生成根拠の区別と混同……………	51
(四)	本質存在と事実存在について……………	57
(五)	事実存在、及び本質存在の認識と認識根拠の問い、及び生成根拠の問い……………	64
(六)	問いの基本形とすべき区別としての認識根拠と生成根拠……………	78
(七)	問いの図式……………	83
<b>第三節 二通りの「存在の問い」における不可分性、及びその可能について…………… 84</b>		
(一)	二通りの「存在の問い」の不可分性追求について……………	84
(二)	『純粹理性批判』において語られるカントの定言 『純粹理性批判』解説ノート』より抜粋……………	87
第一部 先験的分析論…………… 96		
第二部 先験的弁証論…………… 133		
	アンチノミーに対応する存在の問題の各論的検討……………	151
(三)	カントの定言についての後述……………	180
(四)	根源的、超越的領野における事柄についての言及に当たつての諸問題……………	201
(五)	存在論的定式と論理的定式という観点からの不可分性の可能性……………	212

第四節 構造的な壁に突き当たる「問い」…………… 233

- (六) カントの制約を乗り越えて、生成根拠と認識根拠という二つの「存在」の問いを、一つの問いとしてまとめる試み…………… 218
- (七) 両問いの不可分性が成立する可能性の端緒…………… 226

第二章 意志と目的に関わる問い…………… 247

- (一) 初めに疑問ありき…………… 249
- (二) 創造主体としての意志…………… 256
- (三) 目的論の疑問…………… 275
- (四) 機械論的自然観…………… 290
- (五) 自然科学的世界観における目的論的なもの…………… 295
- (六) これまでの問いの考察の概略…………… 307

終  
章

あながき	321
参考文献	327

(凡例) 『純粹理性批判』解説ノート』の原本はカント著『純粹理性批判』篠田英雄訳・岩波書店版である。原文を引用した箇所は『純粹理性批判』(上)をへく(P.123)の記号で示し、『純粹理性批判』(中)をへく(II.P.123)、『純粹理性批判』(下)をへく(III.P.123)で示す。引用文を文脈の都合上、一部修正して用いた箇所、あるいは原文の文意にそって新たに書き直した箇所はへく(P.123参照)で示した。原文中に補足として挿入した語句は( )で示す。そのほかに、文脈のわかりづらいところは各節ごとに語句の先頭にアルファベットの記号(A、B、C……)を付け、同一記号をたどることにより、文脈のつながりを見つけやすくした。

# 第一章 存在への問い

## 第一節 問いの原点

### (一) 我々は問題に突き当たる

我々は問題に突き当たる。そういう時、我々はそれを解決しようとする。そして模索の後、それを解決したとしよう。しかしまた、我々は新たな問題に次々と突き当たる。それらいろいろな問題を次々と解決し得たとしても、あるいは解決をあきらめ、それを無視したとしても、結局は、或る問題が残る。今までのいろいろな問題を解決し得たにもかかわらず、この問題をそのままにしておいては、今までの解決が何にもならなくなるような、あるいはどうしても無視するわけにはいかないような、そういうところに位置する問題がそこに残る。それが「存在」の問題である。我々は否応なしにそれに突き当たる。

古来この問題解決のために、どれほど多くの努力がはらわれてきたことか。それというのも、

そのことが解決されたならば、その他の問題は自ずと解明の糸口がつかめるか、さもなければ、どうでもいい問題となっていくからである。そういうところに、「存在の問題」がある。その問題をそのままにして、他の問題を解決し得たとしても、それは我々の理性が、その本性のどこかで何かを欠落させて自らを納得せしめるということになり、不透明さからの不満足に陥るのをまぬかれ得ない。我々の理性には、自らの能力のいかんにかかわらず、わからないということに對して、納得のゆく理解を要求するという、なんともやっかいな性癖がある。これさえなければ、心のひっかかりが生ずることもなく、常に先へ進もうとする習性だけで、なにもかもが済んでいったことであろう。しかし、反面、これがなければ、今日までの人間の歴史において、偶然知り得たこと以外には、何らの知的開発もなかったであろう。

## (二) 「存在の問題」に取り組む前の問題

我々に課せられたこの「存在の問題」の解明は非常に重要なことであるが、それよりも前におひとつの問題がある。それは、「存在の問題」とは我々にとってどのような形で立ち現れてくるのかという問題である。

これらの状況に臨んだ我々にとって、解明のとりかかりは次のようになる。「なぜ我々は『存

在』を問題とするのか?」。この問題はすでになんらかの答えが示されているのかも知れない。しかし、正面から取り組もうという意気込みの下に、あえてこのところから入ってゆく。

「我々は気がつくこと、永々と続く時の流れのうちにあり、広大無辺なる大宇宙の内にある。我々はそこにいる。そこにいる我々とは、何とはかない存在であるか。いかにも確かさというものが、不十分である。」(「卒業論文」序論より)「存在」の何たるかを確かめずにはいられないという、相当に心もとない地平の上に我々は立つ。我々が依って立つこの地平とは一体何であるか。その上に立つ我々自身とは一体何であるか。この存在そのものを問うと言うこと、これは、このような状況に置かれた我々にとつて自然のなりゆきであろう。

### 「存在者」の「存在」という問題が成り立つかどうかという疑問

しかしこの存在の問題に立ち入ろうとするとき、立ちほだかる疑問点がないわけではない。たとえば、次のように言うことができる。我々は存在している。そして他の物も存在している。「者」という言葉の使用を、生命体だけに限らないならば、存在するものはすべて「存在者」である。だから「存在者」が「存在」するのである。そして、すべての問題はさしあたって、ここから始まる。そして、すべての関係もそこから始まる。そしてそれに尽きる。個別的な意味ではなく一般存在者という存在者全体としては、これら存在者がいつか無に帰するということはあり

得ない。常に、存在者はなんらかの条件、関係により別の存在者に変化、転化するのみである。かくのごとく、存在者が厳として存在するということがひるがえせないならば、問題とされるべき範囲は、存在者が存在する上での関係の問題というところまでに限られるであろう。そして、それ以上のこともそれ以外のことも、問題として取り上げる余地はないように思える。つまり存在者の存在の問題などというようものは、成立しないのではないかという疑問が生ずる。そこで一旦、存在の問題には、どういう類のものがあるのかを見つめてみることにする。

(注) 「存在」と「存在者」

存在という言葉は、通常、「存在すること」を指すが、「存在するものこと」を指すときもある。だが、厳密に存在について論述しようとする場合は、存在することと、存在するものを区別して記述しなければ、混乱のもとになる。この区別を明確にするには、何かが存在することを「存在」とし、存在する何かについては、それは、存在するものであるから「存在者」とする。そして、厳密に存在について考えようとするときは、「存在者の存在」について考えることとなる。

## 「存在の問題」への取り組み、その分類

「存在の問題」に迫るひとつの方法として、(A) 個物(名詞、形容詞で表現されるもの)の解明を直接的にめざすというところで、「そのものの何であるか」の解を求めようとするものである。これは最も一般的な方法で、人類はこれに膨大な努力を費やしてきた。また、(B) バートランド・ラッセルの場合は、個物間の関係そのものに注目した。その関係というものは、個物同士が单子論的に存在する世界と同等か、それ以上に普遍的な存在であるという考え方に基づく。つまり、関係を普遍とみなし、その方向から「存在とは何であるか」の真相に迫ろうとする。(『哲学入門』バートランド・ラッセル著参照)。これも一つの方法であるといえる。

また、別の場合として、(C) 或る個別的対象の疑問から問題が浮上し、その解明へ向かうということから進めていって、存在の根拠の問題に行き着くというものがある。

ここに宇宙が存在する。先述のように、「存在する」ということからの話の出発であれば、これ以上のことに關しては何も否定することはない。「存在する」ことは事実である。しかし、そもそもこのところでは、「存在する」「存在しない」の選択の過程があつたのではないか、そして、「存在する」という側への決定の段階があつたのではないのか。有つてもいい、無くてもいい。しかし事實は、無いのではなくて有る。「それは一体なぜであるか?」。ライブニッツが根拠律に

ついで目覚めた素朴な疑問〈「何故皆無でなくて何かがあるか」〉（「理性に基づく自然及び恩恵の原理」『单子論』岩波文庫P.157）このような存在への問いかけもまた自然的に生じて来る。

また、個別的な存在者に関していえば、〈充足理由の原理によって、我々はなぜこうであつて他のようでないかの充分な理由を持たねばならない〉（『单子論』岩波文庫P.239参照）ということになる。

しかし、このような存在者の存在とは何かという意味での問いではなく、存在者が存在する根拠の問題（この区別は後述する）に関しては、古来より哲学は、かなり淡泊、冷淡であつた。哲学でさえ、このたぐいの問題よりもっと身近なことが、即ちもう少し実用に近い疑問の方が、切実な問題であつたということなのである。例えば「何の為に生きるのか」とか「善とは何か」とか、さらに「存在とは何であるか」という極めて哲学的な問題も含めて、これらはすべて、存在者が存在するという大前提のもとに成立する問題であるが、こういう問題が哲学の主要な問題であつた。だから、この存在の根拠に関する問題は、哲学の主流からいえば特殊であり、これに取り組もうとした人は、ライブニッツを加えたとしても他には、シヨウペンハウエルの『充足理由律の四根について』、シェリングの『人間的自由の本質』、ハイデッガーの『根拠律』『根拠の本質』等、極わずかであつた。

ただし、存在の根拠の問題に関して、ひとつ気にとめておかねばならないことは、〈存在者が

存在するというあらゆる驚異の中のこの驚異（『形而上学とは何か』「後語」P.74参照）に対し、我々はただこの事実を驚異として受け止めるべきだけのものであって、「なにゆえに存在するのか」という問いは、成り立たないのではないかという疑念の余地が生じることである。存在するという事実は、理由の如何を問わず真摯に受け止めるべきことであるとすると、すべての存在者に課せられた、ぬぐいさることのできない、それでいて、理由を問うことのかなわぬ嚴命のようでもある。しかし、こうした捉え方をすることは、やはり、理由を問うこと、そのことを否定するものであり、それは、そのまま問題の成立をも否定するものである。問題の素地が垣間見えるところを問題として認めないというのは、積極的認識をめざす議論にはそぐわない。そこには、存在者が存在するという事実があるのであり、従って、それにとまなう「存在の問題」というのが、充分に成立し得る。

これらの事情も踏まえたとき、次のように言うことができる。

存在の問題は、我々に対して、どんな形で現れるのか。

### (三) 「存在の問題」の生ずる地平、状況

#### 安心立命を得ること

なぜ「存在」が問題となるかという問いに対して、次のような解答でもってこれに応じようと思う。「存在」の問題に取り組むことを、我々の内側から我々自身に要請してくる「何ものか」がある。「それは我々存在者のおかれている立場から生じてくるものである。その立場とは、我々が先験的に安心感の欠如した状態におかれている存在者であるということである。そして、そこからの脱却、言い換えれば、安心立命の境地の獲得が、我々のような存在者にはどうしても必要なことなのである。」（「卒業論文」序論より）、なぜ不安な状態におかれているのか。それは、我々が、変化することをまぬかれ得ない身分であるにもかかわらず、変化を望まないからである。自分自身の統一体としての主体、その消滅、転化、散逸を望まないからである。

#### 人間理性の先験的原理

またもう一方では、我々をその問題の解明にさし向ける性癖としての力が、我々自身の内にある。不可解な事実の原因を突き止めてみたいという、人間理性の先験的原理がそれである。（人

間理性の先験的原理については後に『純粹理性批判』解説ノートの中で扱うことになる。)

## 存在状態に応じた問い

（あらゆる存在者の中で、人間だけが、存在の問題に突き当たっているのである。）（『形而上学とは何か』「後語」ハイデッガー選集P.73参照）（後述（本書P.31）参照）と言われている。少なくとも、現在、我々の知る限りの、知的生命体においてはそういうことになる。これに対し、非生命体としての存在者においては、何の問題も生じない。従って、存在者の存在状態に応じて、存在の問題の表われ方は、はなはだしく異なるものとなる。仮に、存在の問題性において、存在者を区分するとすれば、存在の問題をその存在者がいかに受け止めているかが区分の目安となる。それに従えば、①存在者の存在は言うに及ばず、存在者相互の関係すら問題とならない存在者。②存在者相互の関係は問題となるが、存在者の存在は問題とならない存在者。③存在者相互の関係は、日常性において問題となるが、さらに、存在者の存在が問題となる存在者、ということになる。以上のような区分によれば、さしあたって人間のみが③に属する。他の生命体は②に属する。それ以外の存在者は①に属する。

①に属する存在者は、存在者自体いかように変化しようとならざるがままになる。それ自体崩れようが、流れようが、燃えようが、混合されようが、他のものに再生されようが、何ら不都合の

ない存在者である。要するに、ここでは問題の成立する余地はない。②に属する存在者は、個としての統一体であるから、個体の存続維持は守られねばならない。しかし、これが守られるのであれば、問題の解決はそれほど困難なものではない。問題に突き当たっても、そのつどそれを受け止めるか、それを避けて通るか、解決するかして、先へ進むことができる。しかし、③に属する存在者のみが、解の見当たらない問いを前にして考えあぐねる。③に属する存在者が、最も中途半端な状況に置かれている。②、③の存在者には、程度の違いはあるが、個々の存在者がそれぞれ意識的なものを有する。意識的なものが、その個体の統一的中心となる。意識を有する存在者は全存在者の内では、特殊な存在者と言わねばならない。中でも、とりわけ、③に属する存在者は、極めて特殊な存在者ということになる。この特殊な存在者は、「存在者の存在とは何か」の解を求めようとする。他の一般的存在者は、その解を求めない。これが根本的な違いである。

特殊な存在者はこの全存在者の世界の内、どういう立場にあるのか。特殊な存在者はそれぞれ個別的独立性を有し、その自己存続を切望する。これは、②、③の存在者にみられる特徴である。即ち、他の存在者との物理的合成、崩壊、流出、分解は望まない。個別的独立性を維持することが絶対的な必要条件となる。個別的な独立性を他の代替えで補うということは、自己同一性を失うことであり、ひいては、そのものの存在意義を失うことになる。

一体個物は何時からその独立性を獲得したのか、何がそのきっかけとなるのか、どの時点でその独立性が獲得されたと見なされるのか。初めは、様々なものとの融合物質であったか、あるいは、均一物質の集合体であったかであろう。それがある時点から自己統一体となり、維持、存続を望む個物となる。しかし、結局はそれら自己統一体は永続的なものではなく、いずれ順次崩壊し、その形成物質は離合集散する。しかし、なぜその自己統一体である時に限って自己存続を切望するのか。変化を余儀なくされている宿命を背負いながら、なぜ存続を求めするのか。なぜ不安を抱くのか。そして、なぜ存在者の存在に対する問いをかかげるのか。こうした疑問は、表面的なところをたどっているあいだは、解決のしようがないように思える。

(注) 存在者という用語の内の「者」は、通常、人間存在に対して使用されるが、ここでは人間以外の生命体、有機体としての個物にも「存在者」という使い方をする。さらに、生命体以外の他のいかなる存在するものに対しても、つまり、諸属性の統一体たる個物すべてに対してもこれを使用する。

## 人間等、知的生命体にのみ現れる問い

「存在の問い」が我々にとって必然性を有するものであり、けっして気まぐれな疑問ではないこ

とが推察できるが、その確実性を期すためにも以下のことを付け加えておこうと思う。「存在の問い」の言わば主観的演繹という意味においては、人間的立場からこの問いの生ずる必然性に関わる事柄をあげればよい。人間等生命体は、生命体であるがゆえに、刹那的存在者である。そして、刹那的存在者であるがゆえに個体であろうが、種であろうが必ず滅びる。そして、必ず滅びるがゆえに、自らの存続を意識的であると否とにかかわらず切望する。しかしそれは、切なる望みではあっても、決して叶わぬ望みである。この切望と絶望の葛藤が、不安の源泉となる。従って我々は、否応なく自らの存在に対する不安を抱く。さらには、自らの依って立つ地平の不安を抱く。そして、我々にとってその解消の道は、なにはともあれ、そのものの何であるかを認識することである。根本的な解決をめざすには、そうすること以外にこれといった方策がない。不安の因果的由来、そこを特定し、認識による納得の効果によって精神を落ち着かせるのである。知ることとは、「存在者の、何であるか」を問うこと、そしてさらには、「存在者の存在とは何であるか」を問うことによって、我々がその答えを把握することである。それは、他のいかなる表面的、刹那的、付随的諸問題の解決によっても代替のできない問いである。しかも、ここどころが不明瞭のままでは、まったくもって、我々の存在そのものがおぼつかなくなるという問いである。そういう問いに直面させられているという状況、これが生命体の立場であり、とりわけ人間の立場である。主観的演繹として示せば、「存在の問い」の生ずる所以ゆえんはこのようになる。

# 途中省略

続きは製品版にてお読みください。

## 著者プロフィール

**鈴木 一夫** (すずき かずお)

1948年生まれ

1974年 愛知大学文学部哲学科卒業

35年前に書いた卒業論文『存在原因と存在理由との根源的不可分性について』が本書の中核を占めている

現在、自動車部品製造会社役員

愛知県岡崎市在住

## 人間的問いの本質

「存在者」が「存在する」という驚異の中の驚異を経験する人のために

---

2011年 1月15日 電子版発行

著者 鈴木 一夫

発行者 瓜谷 綱延

発行所 株式会社 文芸社

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1

電話 03-5369-3060 (編集)

03-5369-2299 (販売)

<http://www.boon-gate.com>

© Kazuo Suzuki 2011 Coded in Japan

ISBN978-4-286-09705-3

(紙の書籍をお求めの場合には、お近くの書店にてお尋ねいただくか、文芸社ホームページ

<http://www.bungeisha.co.jp> をご参照ください。)